



Title	燃料危機を乗り越えるセーフティ・ネット：インドネシア政府の「灯油からプロパンガスへの転換プログラム」をめぐって
Author(s)	阿良田, 麻里子
Citation	GLOCOLブックレット. 2010, 3, p. 61-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48255
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

燃料危機を乗り越える セーフティ・ネット インドネシア政府の「灯油からプロパン ガスへの転換プログラム」をめぐって

阿良田 麻里子 国立民族学博物館外来研究員

はじめに

フード・セキュリティの基本は、まず食料を得ることであるが、その食料を調理して食べられるようにできるということもまた、フード・セキュリティの重要な一側面である。本稿では、2004年から2008年にかけての世界的な燃料危機と燃料価格の高騰がインドネシアの庶民の台所に与えた影響をとりあげ、西ジャワ州の村落部をおもな事例として、燃料不足を乗り越えるために食事や燃料を融通し合う人々の戦略について述べる。

1. 灯油コンロとガスコンロ

人口の大部分が集中する西インドネシアでは、米飯を主食としており、飲料水を煮沸消毒する習慣も深く浸透している。炊飯をはじめとする調理にも、飲料水の煮沸にも、当然、燃料が必要である。この地域で広く使われている家庭用のおもな燃料は、薪、木炭、ケロシン(灯油)、プロパンガス(LPG)であった¹。

1 2002年のインドネシアエネルギーバランス統計によれば、家庭で消費されるエネルギーは、軽石油製品412,312テラジュール(TJ)、石炭以外の固形燃料547,493TJ、電気123,816TJに対し、都市ガスが267TJ、LPGと天然ガス液が96TJであった(中央統計庁Biro Pusat Statistik 2003: 20-21)。ただし、都市ガスの使用されている地域は限定的であるらしく、調査地周辺では都市ガス設備は全く見られない。電気は村落部でも全世帯に行き渡っているが、その主な用途は照明、テレビ・ラジオの視聴、電動ポンプなどで、電熱器や電気ポットは一般的ではなく、電気炊飯器や電子レンジを所有するのは、都市部の富裕層や中間層にほぼ限られていた。2001年当時、調査集落にはマジックジャー(電気保温器)を所有している世帯はあったが、電気炊飯器を所有している世帯はまったくなかった。

薪や木炭を使用するカマドについては後ほど扱うことにして、まずは、この燃料危機で最も大きな問題になったコンロを取り上げ、その使用状況について述べることにしよう。インドネシア政府が「灯油からLPGへの転換プログラム」を2006年末に開始するまでは、LPGコンロの使用はほぼ都市部の比較的裕福な層やレストランなどに限られており、庶民にとって身近で手軽なコンロと言えば灯油コンロであった。というのも、当時普及していたLPGポンベはおもに12キログラム入りのもので、一度に12キログラム分のガス代を支払うのは庶民には負担が大きかったからである。また、最初に購入する際には高額なポンベ代を支払う必要があった。空のポンベと充填済みのポンベを交換することでガスを補充するシステムなので、調理中にガスが切れた時のことを思えば予備のポンベも必要である。都市部では業者が定期的に巡回するが、そもそもガスの利用者がほとんどいない村落部では業者の巡回もなかった。

これに対して、灯油コンロならば低所得者層でも容易に燃料の補給ができた。特に村落部では、コンロと言えば灯油コンロであった。2000年から2001年にかけて西ジャワ州バンドゥン県アルジャサリ郡B行政村(desa)のB村(kampung)という農村で台所設備などの調査をした際の様子を紹介しよう。当時、調査対象の13世帯全てが灯油コンロを所有し、LPGコンロを所有する世帯は皆無であった。灯油コンロは一口コンロなので、同時に複数の調理を行うために複数のコンロを所有している世帯も多い。各戸の所有数は表1の通りである。ただし、所有数3～4台になっている世帯のコンロには、調子が悪くてほとんど使っていない古いものも含まれている。

村人はおもに村内のワルンと呼ばれる簡易商店や行商人から日用品や食品を買っている。町の市場やスーパーマーケットで買うよりも割高になるが、交通費や時間が節約できるし、品物を小分けにして売ってくれるので、日常的な買い物には都合がよい。B村の東集落では、約50世帯に対して大小9軒のワルンが店を開いていた。うち5軒はほぼ食べ物に特化した小さなワルンであったが、残り4軒では灯油を含めた日用品も扱っており、調理中に灯油がなくなってもすぐに買い足すことができた。ワルンでの灯油の購入は、小さなポリタンクを持参して量り売りで灯油を移し入れてもらうシステムである。たまたま最寄りのワルンが品切れでも、近所に

表1 灯油コンロの所有数
(2000～2001年調査、13世帯中)

1台	5世帯
2台	5世帯
3台	2世帯
4台	1世帯

はほかのワルンがあるし、少しならば隣人から灯油を分けてもらうことができた。

村の典型的なワルンは、住宅の一部を簡単に改装した小さな売店で、早朝から夜まで開いている。少額の資本金で簡単に始められるので、小金を貯めた主婦が商売を考えるとときに、代表的な選択肢のひとつとなっている。ワルンで売る食品や日用品の仕入れは、通常、店の経営者が深夜から明け方にかけてミニバスで町の市場や商店へ行って買ってくるという形式をとる。買い出しの行きがけに、名前を書いた空のポリタンクを給油所におろしていく。すると帰りにはタンクに灯油が満たされているので、これを受け取って代金を支払う。ワルンの顧客が一度に購入する量はせいぜい数リットルなので、一回の買い出しで、何世帯分もの燃料をまかなうことができたのである。

2. 燃料危機と「灯油からLPGへの転換プログラム」

さて、「灯油からLPGへの転換プログラム(以下、転換プログラムと略す)」の内容は、国有石油ガス会社であるプルタミナ²の主導により、LPG用の器具を無料配布すると同時に、灯油の供給量を制限してガスへの移行を促進するというものであった。配布された器具は一口コンロ、ガスポンベ、調節器のセットで、配布対象となったのは、低所得者世帯および屋台等の商売人である。ガスポンベは従来よく使われていた12キログラム入りのものではなく、3キログラム入りの小さなものが用意された。2007年の初めから首都ジャカルタで配布を始め、西ジャワ州へと広げていき、2009年には中ジャワ州、東ジャワ州、バリ州までを完了するという計画であった。

このプログラムが実施された背景には、2004年頃から2008年にかけての世界的な燃料危機と、それに伴う国際的な原油価格の高騰があった。インドネシアでは、BBM (bahan bakar minyak、燃料油) と呼ばれるガソリンや灯油などの石油燃料の価格が消費者物価を決める大きな要因となっている。石油燃料価格があがると、生鮮食品も含め生活必需品の物価が一斉にあがる

2 プルタミナは国内石油ガス産業に関する独占的な権限を持っていたが、2001年に制定された新石油ガス法により独占権を失い、2003年に国有株式会社に変更された(坂本2008:1)。

というパターンがあるので、政府は、物価を安定させるためにも燃料価格を補助金によって抑えてきた。しかし、スハルト政権崩壊後、自国の産油量が落ち込んだこともあって、補助金の負担は大きくなっていった³。そこで、家庭の主要な燃料を灯油からより安価なLPGへ移行させて、補助金の経費を削減しようとしたのである。

表2 灯油とLPGの価格と補助金
(単位はルピア)

2007年9月	灯油 1リットル	LPG 0.4kg
国際市場価格	5,688	2,920
国内販売価格	1,818	1,385
政府の補助金	3,870	1,535

主要英字紙ジャカルタ=ポストによれば、1リットルの灯油は0.4キログラムのガスに相当する。この記事から、当時の両者の国際市場価格、国内販売価格、政府の補助金をまとめたものが表2である⁴。補助金が、年間25兆ルピア(2007年半ばのレート1円=約90ルピアで計算すると約2,700億円)の削減となるのに対し、2008年の予算案では転換プログラムの一年間の経費は2.4兆ルピア(同じく約260億円)である(Jakarta Post 2007.9.10)。

プログラムの実施は計画より遅延したものの、2009年12月のブルタミナの発表によれば、バンテン州、ジャカルタ首都特別区、西ジャワ州、ジョクジャカルタ特別区、南スマトラ州ではすでに完了し、2010年前半期で全プログラムが完了する予定となっている。(Jakarta Post 2009.12.23)

3. 転換プログラムの影響

しかし、プログラムの実施に伴っては、さまざまな問題が起こった。まず、ガスの補給の問題である。転換プログラムで配布される器具一式には予備のボンベがないので、一旦ガスを使い切らなると、次のガスを買うことができない。ガスの業者は村落部にはほとんど巡回してこない。村内のワルンでもガスを売っているが、すぐに品切れになってしまう。そもそも少額な資本で商売をしている零細なワルン経営者は、高価なボンベをいくつも買えるほどの資金の余裕がない⁵。たとえボンベを買っても、一度の買い出しではせいぜい数戸にしかガスを供給することができないのである。

3 インドネシアは石油や液化天然ガスの産出国であり、原油の輸出国でもあった。しかし、スハルト政権が1998年に倒れると、産業の発展を牽引する強力な政治リーダーを失ったことが産油量にも影響し、2004年には原油の輸入国に転じた。製油施設も不効率なため石油製品も輸入している。

4 ただし記事では補助金の額は灯油 Rp. 3,869、LPG Rp. 1,534となっている。

5 2008年調査当時3キログラム用のボンベの価格は15万ルピアであった。



写真1 配給品のガスコンロ(左)と、灯油コンロ(右)



写真2 安全装置つきの調節器を実演する青年。売値は30万ルピア

また、配給されたガス器具は、質が悪く、ガス漏れを起こすことがあった。人々がガスの扱いに慣れていなかったことも原因なのか、プログラム開始当初、ジャカルタ各地でガス漏れによる爆発や火災が起こり死傷者を出した。そのため、特に年配者の間では、ガスコンロを恐れて、使いたくないという人が多かった。ガスの補給のためには、空のボンベから調節器を外して新しいボンベに自分でつなぎなおさなければならず、慣れない利用者に対し、操作を間違えてガス漏れを起こすのではないかという恐れを抱かせた。このため、訪問販売で、ガス漏れを防ぐ安全装置つきの高価な調節器を実演してみせ、分割払いで売るといった商売も登場した。

ガス器具自体を入手できない世帯もあった。器具の配布数は住民台帳を元に決められたが、世帯数の調査と器具の配布に時間差があったため、その間に引っ越しをした人は、配給を受けることができなかった。不良品や故障への対応もほとんどなかった。

このような状況下で転換プログラムによって灯油の供給が制限されたために、人々は使い慣れた灯油を求めて、給油所で長蛇の列をなした。2008年なかばに最高潮に達した世界的燃料危機の影響も相まって、灯油の価格は暴騰した。

表3と表4は、2001年から2007までの年西ジャワ州村落部における燃料価格と農業労働者の賃金の推移をまとめたものである。灯油の消費者価格の平均値は、2001年に1リットルあたり約684ルピアだったが、2006年から2007年にかけては2,640から2,680ルピア程度と、5年間で3倍以上に上がった。同じ時期の農業労働者の平均賃金を見ると、インフレにより上がってはいるが、

その上昇率は2.5倍足らずにすぎない。

暴騰した2008年の灯油価格はこの統計資料には記されていないが、8月から9月にかけての調査時には、調査地近辺の給油所ではリットルあたり7,000ルピアになり、品切れ状態が続くと12,000ルピアまで値を上げると店まで現れた。村人が遠くの店へかけて行って長時間並んでも、手に入るの一人2〜3リットル程度であった。これほど急激な価格高に見合う収入の増加があるはずもなく、交通費や手間暇の負担も馬鹿にならなかった。

さらに2008年の後半には、追い打ちをかけるように、LPGの供給不足が問題となった。3キロ用のボンベの在庫が不足したためである。灯油よりも安く手に入るはずだったガスの価格も上昇し、元売りのガス販売所での品切れが起こった。

マスコミは、燃料問題に直撃された貧困層の人々の困窮ぶりを盛んに報道し、各方面から政府やブルタミナの不手際を非難する声があがった。

4. 親族関係によるセーフティ・ネット

しかし、ちょうど転換プログラムに巻き込まれていた調査地で、実際の暮らしぶりを見てみると、村人は確かに問題に直面して困ってはいたのだが、さまざまな方策を講じてこの事態に対応していた。日頃つちかっていた親族関係や、地域コミュニティのありかたが、セーフティ・ネットの役割をはたしたと言えるだろう。

まず、親族関係について見てみよう。筆者のおもな調査対象であるスダ民族は、西ジャワ州およびバンテン州をおもな居住地とする民族集団である。宗教はイスラームが圧倒的多数派である。都市部には少数ではあるがキリスト教徒も見られ、バンテン州の一部地域には独自の古い信仰を守る人々もいるが、西ジャワ州の村落部に住むスダ人はほぼ100パーセントムスリムである。

スダ民族は双系出自で、リネージやクランを形成しないが、血縁関係や姻戚関係にある親族とは広い範囲で結びつきをもつ。結婚したばかりの夫婦は、まずは妻の実家に同居し、出産や妻の

表3 西ジャワ州村落部の燃料価格
(単位はルピア)

	灯油(1リットル)	木炭(1kg)	薪(40kg)
2001年	684.09	1,007.89	5,551.57
2002年	1,034.41	1,127.99	6,154.80
2003年	1,134.33	1,357.79	7,431.97
2004年	1,185.06	1,392.46	8,416.90
2005年	1,587.09	1,570.90	9,013.49
2006年	2,653.17	1,896.88	11,019.74
2007年	2,653.33	1,768.42	13,324.08

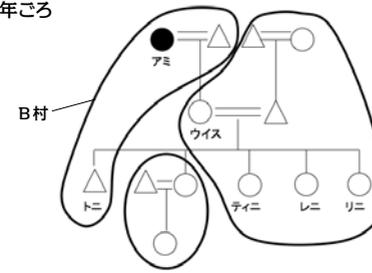
中央統計庁資料(Badan Pusat Statistik 2008a: 203)に基づいて引用者作成。

表4 西ジャワ州村落部の農業労働者の賃金
(半日4〜6時間分、単位はルピア)

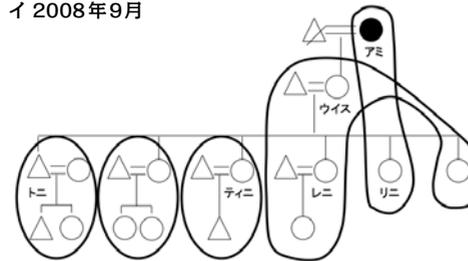
	耕起	田植え	草取り
2001年	9,049	7,039	7,681
2002年	11,100	8,106	9,020
2003年	12,192	10,296	10,306
2004年	11,315	10,075	10,158
2005年	12,661	11,604	10,934
2006年	18,842	15,478	16,712
2007年	21,487	18,071	18,783

中央統計庁資料(Badan Pusat Statistik 2008b: 10-12)に基づいて引用者作成。

ア 2002年ごろ



イ 2008年9月



ウ 2009年9月

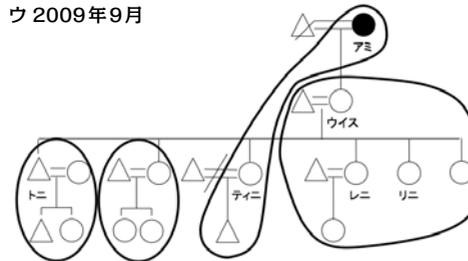


図1 アミ家一族の居住形態の変遷
(家系図の一部は省略し、同じ家に同居している者同士を線で囲ってある)

妹の結婚などを機に独立して、親世帯の近隣に核家族で暮らすことが多い。(ハルソヨ1980; 渡辺1992など)。世帯構成は流動的で、祖父母が孫を預かったり、オジオバが甥や姪を養い子として育てることもよくある。独り身の高齢者は、子ども・孫・甥・姪などの世帯に同居するか、逆に自分の家に独身の孫・甥・姪などを住ませて一緒に寝泊まりしてもらうことが望ましい。

筆者の調査地の事例を紹介しよう。私は、2000年から2001年にかけて西ジャワ州バンドゥン県アルジャサリ郡B行政村のB村に約1年間住み込んで、言語と食文化を中心とした調査を行ったあと、断続的にこの村を訪れている(阿良田2004; 2008)。ここでは、おもに2008年の8月〜9月に再訪した際の観察やインタビューに基づいて稿を進める。

B村の元住民アミ(仮名。以下人名はすべて仮名)は、1年前に夫を亡くし、隣のM行政村のC村に引っ越した。そこに、彼女の一人娘ウイスや孫達の家が徒歩2〜3分圏内に集まっていたからである。B村からC村は徒歩で30分ほどの距離である。

図1はアミの子孫の家系図である。同じ家に住んでいた者同士を線で囲ってまとめている。イが2008年の調査時点を表している。ウイスの第一子から第四子まではすでに結

婚して子どももいるが、全員、同じ集落内に住んでいる。ウイス家には、第四子のレニ一家が同居している。第五子と第六子は、ほかの兄弟とは年が離れていてまだ幼く、ウイスの孫たちと同年代である。アミは、夫の死後しばらくウイス家に身を寄せていたが、やがて元の家を売って、ウイス家の近所の中古住宅を買った。アミがさびしくないようにと、小学生の孫娘リニ(ウイスの第五子)がアミの家に寝泊まりしている。リニは、アミの家で食事をしたり、母ウイスの家で食事をしたりしている。

C村では2008年7月の末から8月にかけてガス器具が配給され

た。ウイス家とレニ家の場合、世帯はふたつとみなされるので、2セットのガス器具が配布された。コンロのひとつは壊れていて使えなかったが、この2世帯は料理も食事も共にしており、残るひとつのコンロを使って料理をすることになった。余ったガスボンベひとつが、同居している2世帯にとってだけでなく、他の独立した子ども世帯にとっても、ガス切れの際の予備の役割を果たすことになった。

アミは、C村に移住したばかりで、配布リストから洩れてしまった。元のB村でも転出済みという扱いで結局ガス器具の配給は受けられずじまいだった。近所で灯油を入手することが難しくなってからは、どこそこの村では灯油を売っているという話を聞くと、アミは、バイクを持っている孫やその配偶者に頼んで、買いに行ってもらった。

アミの娘ウイスは、通常の慣習とは違い、結婚してからは両親のもとを離れ、C村にある夫の生家に同居していた。しかし、スダではごく一般的なことであるが、離れて住んでいても、アミ夫婦と娘一家は互いに頻繁に行き来をし、非常に緊密な関係を保っていた。スダでは、子ども同士が結婚をした親同士の関係はベサン(bésan)と呼ばれ、ごく近い姻戚関係とされている。アミ夫妻と、ベサン関係にあるウイスの舅・姑も仲がよかった。ウイスの舅・姑もアミの夫も2003年から2007年にかけて相次いで亡くなってしまったが、みな健在だったころには、アミ夫妻がB村で儀礼をおこなったり、伝統芸能の保持者であったアミの夫が興行を行ったりする際には、必ずウイスが子どもたちや姑や姑の妹とともに泊まりがけで手伝いに来て、みなでにぎやかに料理をしたものである。また、ウイスの長子トニは独身時代B村のアミ夫妻の家に住んでいたし(図1ーア)、第三子ティニは2008年の末に夫と離婚してからは、息子とともにアミの家に同居するようになった(図1ーウ)。

このような経緯を経て、アミと娘一家や孫たちは、互いに独立した世帯でありながらも、損得勘定にとらわれず助け合い、与え合う関係をしっかりと築いてきた。サーリンズの分類するところの「一般的互酬性」⁶が成り立つ間柄である。孫たちの婚礼の際や、

トニがバイクを購入する際には、アミ夫妻が金銭的援助をしたし、逆に寡婦となったアミがC村の家を購入する際には、ウイスもトニもティニも、自分たちの経済状態に応じて援助をしている。

アミは自前の交通手段をもっておらず、C村の公共交通手段は、乗り合い馬車かバイクタクシーしかない。灯油の供給不足にあたって、高齢のアミが買い出しに行き長い行列に並ぶことはなかなか難しかった。しかし、若い孫世代の協力を得て、いくらかの灯油を入手することができた。また、ガス器具を持っていて灯油コンロの必要性の低い娘や孫たちから残った灯油を分けてもらったり、ヤカンや水を娘の家に持っていき、ガスコンロで飲み水をわかしてもらったこともあった。また孫娘ティニと同居するようになってからはティニのコンロを使用している。

他の世帯でも、調理中にガスが切れたら、親族の台所へ行って調理の続きをさせてもらうという形で燃料を融通しあっていた。調理済みの食事そのものを融通し合うこともあった。産婆を職業とするアミは、通常は自炊をしていたが、仕事が忙しくて料理をする暇がない時には娘の家で食事をしてきた。いよいよ燃料不足が深刻になってくると、アミは産婆の仕事がなくてもしばしば娘の家で食事をするようになった。

筆者が2008年8月から9月および2009年9月にB村とC村を訪れた時期は、ちょうどイスラーム教の断食月に当たっていた。断食月には、1ヶ月間にわたって、毎日暁から日没までの間飲食や喫煙を断って、争いごとを避け心を浄く保たなければならない。断食月は、特別礼拝を行うなどして神に近づく神聖な月であるだけでなく、断食のつらさを分かち合い、日没後の断食明けの食事や夜明け前の食事をともにすることによって家族や信徒同士の連帯感が高まる楽しい季節でもある。

この地域では、夜明け前の食事をサウル(saur)と呼ぶ。朝4時頃に行われる暁の礼拝の10分ほど前にサイレンが鳴ると、もう飲み食いをしてはいけない。この断食開始の合図をイムサック(imsak)と呼ぶ。ねぼうをしてイムサック直前に食べ物をかきこむ

6 generalized reciprocity。「一般化された相互性」「一般的互恵性」「総合的互酬性」なども訳される。等価物を交換することを意味する「均衡

互酬性(balanced reciprocity)」に対し、「一般的互酬性」とは、近親間に見られるように、直接的な返礼を期待せず、惜しみなく与え、その返礼は漠然と期待はされるが、いつどのような形で返礼しても、またたとえ返礼できなくてもかまわぬような互酬性を指す(サーリンズ1972: 182-184; 1984: 233-235ほか)。

人もいるが、ふつうは、夜3時ごろに家族が集まってサウールの食事をとる。主婦はその1時間前には起きて、米飯やおかずを温めなおしたり湯を沸かしたりといった作業をしなければならない。サウールの準備が間に合わなければ、一家全員が空腹のまま一日の断食に臨むことになる。

他宗教の信徒も混住する都市部では、サウールの知らせは比較的静かに行われる。しかし、住民の100パーセントがイスラム教徒である村落部では、サウールの呼びかけは騒々しいと言ってもよいほどである。B村では夜2時ごろにモスクのスピーカーから大音量で「サウル、サウル、サウル」という放送がされるし、C村では2時から3時にかけて青年団の有志がスピーカーや楽器をかついで村中を練り歩き、獅子舞を踊ったり歌を歌ったりして人々を起こして回る。小さな家が密集する村の中では、食事の準備をする隣人の気配もつつめけである。

2008年の訪問時、私はアミの家に泊まっていた。短期の訪問だったこともあり、体調も優れなかったので、断食をするつもりはなかった。正直なところアミも断食をしていなかったし、サウールを用意するにも灯油がない。しかし、このような状



写真3 4世帯から4世代が集まったサウールの食事。夜3時頃

況下では、サウールの食事をしないということは、断食をしないことを隣人に喧伝するようなもので、アミは「恥ずかしい」と言う。同居する小学生の孫娘リニは断食に挑戦しているので、ムスリムとしての規範も見せておかなければならない。そこでアミもリニも私もウイスの家へ行ってサウールを食べることにした。すると、すぐ隣の家に所帯を構えていたティニも、自分の食べ物を携えて息子とともにウイスの家へやって来た。もともとウイスと同居しているレニも交えて、4世帯から4世代がそろって食事をするようになった。断食月に限らず、アミも、所帯を持つ孫たちとその配偶者や子どもたちも、このようにことあるごとにウイスの家に集まって、ともに食事をしてきた。

儀礼のもてなしなど特別なイベントとしてホストが客を招く場合には、ホストが食べ物をすべて準備するが、特別な理由なく行わ

れる日常的な共食では、通常それぞれの世帯が食べ物を持ち寄る。料理を床に並べて、周りを囲むように座り、各自一枚の皿に米飯とおかずを盛り合わせて食べる。持ち寄ったおかずはみなで分け合うが、米飯は基本的には各世帯ごとに持参した容器からとる。主食である米は貴重な食料である。賃労働の際にも食事つきか否かで賃金体系が異なっており、食事に対するコスト意識は高い。米飯を世帯ごとに分けておけば、一緒に食事を楽しんでも、そのうちの誰かに特別な負担をかけずに済む。ここに、それぞれが世帯として独立した家計を営んでいるという意識が表出する。

しかし、米飯をくれと乞われれば、誰もが快く分け与える。特に小さな子どものための米飯は、遠慮する必要はないし、後で借りを返す必要もない。たとえば、燃料問題も落ち着いた2009年の断食月には、アミの家に、小学生であるトニの息子が夜3時半ごろに米飯をもらいにやってきた。トニの妻が寝過ぎて米飯を蒸し直す暇がなかったからである。トニの息子は温かい米飯を皿にとって持ち帰り、家にあるおかずとともに食事をとった。

また、スダの慣習では、食事時に来客があれば、一緒に食べるように勤めなければならない。客のほうは、隣近所で頻繁に顔を合わせる間柄であれば遠慮するのが普通だが、遠方からの稀な来客ならばむしろ誘いを受けたほうがよいとされる。ともに食事をとって楽しい時間を過ごし、謝意を表すことが、ホストに敬意を表すことにもなる。

日ごろからともに食事をしたり、気軽に食べ物を分かち合ったりする、こういった慣習のもとでは、燃料に困っているアミと、その家に滞在する私が、ウイスの家へ行って食事をするのは、たとえば夜中の3時であっても、ごく自然な流れなのであった。

5. 代替器具によるセーフティ・ネット：カマドへの回帰と電気炊飯器の利用

人々が問題を乗り越えるために利用したのは、親族のネットワークだけではない。灯油やガスのコンロが使えなければ、他の燃料を使うという手段もあった。

灯油コンロが広く普及していたとはいえ、村落部では、薪や炭を燃料にしてカマドで調理することもまだ一般的に行われていた。先に触れたB村東集落での2002年の台所設備調査の結果



写真4 廃材を薪にする隣人

では、13世帯中11世帯はカマドを所有していた。私の観察では、当時日常的に灯油コンロのみを使用していたのは4世帯で、7世帯はカマドと灯油コンロを併用し、2世帯は日常的には灯油コンロはほとんど使わずカマドのみを使って調理をしていた。

もともとカマドを常用していた世帯の場合、影響は少なかった。薪の値段も上がったが、これらの世帯は薪を購入するのではなく、自分で森や竹林からとってきたり、人に頼んでとってきてもらったりして、薪のストックも十分に持っていた。このような世帯の場合、配給されたガス器具を転売してしまうこともあった。隣人にコンロを売ったり、ワルンにポンペを売ったりしたのである。

一方、もともとほとんどカマドを使っていなかったのに、燃料危機によってカマドに回帰した人もいた。土を固めて作った本式のカマドが家になくても、臨時のカマドを作ることは容易である。この地域では、婚礼や割礼の披露宴の際に、数百人の招待客を自宅に呼んで食事を供する習慣がある。この時には、地面にレンガや石を重ねて臨時のカマドを作って大量の調理をする。カマドの使用経験が全くない人はいないと言ってもよい。

アミの家にもウイスの家にも、屋内にカマドの設備があった。アミはそれまで、日常の調理にはもっぱら手軽な灯油コンロを使い、儀礼の準備など大量に調理をする時にだけカマドを使っていた。しかし、いよいよ灯油が入手できなくなると、元の家の一部を取り壊したときの廃材を薪にして、カマドで調理をするようになった。薪割作業は、このような作業に慣れている隣家の中年女性に頼んでわずかな手間賃でやってもらった。

工場労働者や教員など経済的に余裕のある層では、逆に最新の調理道具である電気式の自動炊飯器を購入して、調理に利用するようになったケースもあった。自動炊飯器の利用目的は炊飯だけではない。たとえばワルンではよく温かい魚のツミレ団子のスープを鍋に常備して、客の好みで麺を入れるなどして販売していたが、B村ではこのスープを温かく保つために自動炊飯器を用いるワルンが登場した。

6. 商習慣によるセーフティ・ネット

B村では、燃料危機以前には職業的に薪を売っている人はいなかった。日常的に薪を使う人々はおもに自分たちで薪を作っていたし、現金収入のある人にとっては灯油を買うほうが手軽だったからである。しかし、灯油の供給が減らされると、薪を作って村内で売り出す村人が現れた。



写真5 薪の商売を始めたB村の村人

ワルンや行商の例に見られるように、機会と元手があれば、普通の村人が気軽に商売を始めることは、インドネシアでは一般的である。隣人や親戚を相手に小さな商売をすることは、ごく当たり前のことで、金銭をやりとりするのに気後れする必要はない。顧客となる側にとっても、たとえそれが自分でもできる簡単なこと、自分でも作れる普通のものであっても、誰かが代わりにして

くれることや作ってくれることに対して手間賃を払うということは、慣れ親しんだ習慣である。

このような慣行が、燃料危機に際して村人にいち早く薪の商売を始めることを促した。そして、その結果として、体力的にあるいは時間的に薪を自分で用意することが難しい人々も、比較的容易に手頃な値段で燃料を調達することができるようになったのである。商売の目的は、当然ながら品物を売却して利益を得ることである。しかし、売り手は自分の利益を考えているだけではない。

燃料を容易に入手できない社会的弱者への配慮も、動機のひとつになっていると言える。

LPGを扱うワルン経営者も同様である。B村のワルン経営者の女性に2008年9月に聞いた話を紹介しよう。彼女の夫は高校教師で給与収入があるので、資金繰りは比較的余裕があるが、それでも彼女は予備のポンペを3本購入するのがせいっぱいだった。ポンペ代が1本15万ルピアなので45万ルピアの投資である。3キログラムのガスの仕入れ値が15,000ルピアで、売値は17,500ルピアに設定している。いつもは一日に一度、朝ミニバスで買い出しに行くだけだが、ガスが売り切れるとバイクでガスの販売所まで買いに行く。交通費と手間を考えると、大した儲けにはならない。しかし燃料がないと「人々が karunya (可哀想、哀れ)だから」、買いに行かざるを得ないと彼女は言う。商売というものが、売り手にとっての利益になるだけでなく、買い手をも利するものであると意識されていることがここに表れている。

おわりに

この地域における燃料問題は、ガス器具が全世帯に行き渡り、人々がその使い方に慣れて、世界的な景気後退に伴う原油価格の値下がりの影響が国内各地に及ぶにつれて、次第に落ち着きを見せた。2009年9月に再訪した際には、ワルンのポンペの備蓄も増えて、ガスは近所で買えるようになり、灯油も高価ではあるが再び入手可能になっていた。

もしもさらに深刻な事態へと進展していたらどうなっていたかはわからない。しかし、少なくとも2008年の時点では、人々は、親族との一般的互酬性、隣人を相手にした小規模な商売や有償のサービス提供の習慣、そして旧来の台所設備であるカマドや新しい調理道具である電気炊飯器といったさまざまな要素を駆使して、燃料や調理済みの飲食物を手に入れ、融通し合っていた。そこで高齢者や貧困層のフード・セキュリティを保障するセーフティ・ネットの役割を果たしていたのは、政府でも企業でもなく、平日頃人々が長い時間をかけて築きあげてきた緊密な絆であったということが言える。

謝辞

2000年からの長期調査は、財団法人大阪国際交流センターの大阪・アジアスカラシップによって実施が可能となった。また燃料問題に関する2008年の調査は、国立民族学博物館の研究費によっておこなった。GLOCOLの共同研究に参加し、メンバーの方々から学ばせていただいたことが、私がフード・セキュリティというテーマに関心を寄せるきっかけとなった。またメンバーのみなさんからは折に触れてコメントやご助言をいただいた。B村・C村のみなさんは、常に私をあたたく迎え入れ、快く調査に協力してくださっている。上記すべての方々に心からの感謝を捧げるとともに、不足な点や誤りがあればひとえに私の責任であることを申し添えたい。

引用文献

阿良田麻里子

2004 『インドネシア・スダの食文化：言語人類学的観点から』総合研究大学院大学博士学位論文。

2008 『世界の食文化6：インドネシア』東京：農文協。

サーリンズ、マーシャル・D

1972 『現代文化人類学5 部族民』青木保訳、東京：鹿島出版会。

1984 『石器時代の経済学』山内昶訳、東京：法政大学出版局。

坂本茂樹

2008 「東南アジアNOCに新たな動き：タイPTTとインドネシア Pertamina」石油天然ガス・金属鉱物資源機構調査部：http://oilgas-info.jogmec.go.jp/report_pdf.pl?pdf=0802_out_m_id_th_ptt_p Pertamina.pdf&id=1927(2008年10月11日)

ハルソヨ

1980 「スダの文化」土屋健治訳、クンチャラニングラット編『インドネシアの諸民族と文化』加藤剛・土屋健治・白石隆訳、東京：めこん、pp. 369-394。

渡辺敦

1992 「食事の提供・獲得をめぐる社会関係：インドネシア、西ジャワ州南バンテンの村落から」『東南アジア研究』29(4)：422-453。

Badan Pusat Statistik

2008a *Statistik Harga Konsumen Pedesaan di Indonesia 2001-2007*, Jakarta: Badan Pusat Statistik.(インドネシア村落部の消費者物価統計2001-2007)

2008b *Statistik Upah Buruh Tani di Pedesaan 2001-2007*, Jakarta: Badan Pusat Statistik.(村落部農業賃労働者の賃金統計2001-2007)

Biro Pusat Statistik

2003 *Neraca Energi Indonesia 1998-2002*, Jakarta: Biro Pusat Statistik.(インドネシアのエネルギーバランス1998-2002)